

コロナ禍の熟語 成り立ちは

「免疫」「逼迫」… 白川漢字学で解説

新型コロナウイルス感染症拡大に伴い近年、「感染」「免疫」「救急」といった二字熟語が頻繁にニュースに登場するようになった。「白川静さんに学ぶ 漢字がわかる コロナ時代の二字熟語」（小山鉄郎著）では、そんなコロナにまつわる二字熟語に注目し、漢字学の第一人者、故白川静さんの研究を基に、熟語の成り立ちを分かりやすく解説している。

例えば医療現場の「逼迫」。本書によると、「逼」にある「畠」はもともと下部にふくらみのある器の形で、「ふくらんだもの」「満ちたもの」を意味するという。つまり「逼迫」とは「丸くふくらんだもの」が迫るように、危難が身に迫ることと説く。

が、本書の説明はこれだけで終わらない。白川漢字学の特徴は、一つの漢字の意味が理解できること、つながりのある文字群も理解できることに



ある。新型コロナの感染源とも疑われる「蝙蝠(コウモリ)」の成り立ちについて説明した上で、「蝠」の字の音が「福」に通じるので中国ではコウモリがめでたい動物として愛されていることも紹介している。

感染拡大の波の大きさによっては今後も「在宅」「自粛」といった二字熟語が求められかねない状況が続く中、それらの漢字の知識も深められる一冊となりそうだ。

論創社刊、1430円。

「白川静さんに学ぶ 漢字がわかる
コロナ時代の二字熟語」